



筑紫女学園大学リポジット

Business as Concealed under "Education" : The Shrewd Managerial Strategies of Early-Learning Adovocates

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-02-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 古賀野, 卓, KOGANO, Taku メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/720

「教育」の裏にある「ビジネス」 —— 早期教育推進論者たちの巧みな経営戦略 ——

古賀野 卓

“Business” as Concealed under “Education”:
The Shrewd Managerial Strategies of Early-Learning Advocates

Taku KOGANO

1. 問題の所在

幼稚園教育は、「幼児期の特性を踏まえ環境を通して行うものであることを基本とする」¹⁾。幼稚園教育要領の第一章総則にある、文字通り、保育の基本を示した文章である。その意味は、保育者の役割が何かを子どもに「教える」ことにあるのではなく、子どもたちが生き生きとあそびを展開できるように、言葉かけをしたり環境の構成をしたりすることで、子どもが本来持っている自発性・創造性を「引き出す」ことにある。こうした保育観のもとでは、保育者が文字や数を意図的・積極的に子どもに「教える」行為は、これまで、その基本に反することと見なされてきたし、少なくとも「幼児期にふさわしい生活」²⁾の範疇には入っていなかったと思う。

ところが、最近の保育園・幼稚園では、漢字・算数・英会話など、特定の教育目標を掲げて子どもに何かを「教える」というシーンが増え、それが親にも違和感なく受け入れられるようになってきた。また、街の本屋で、家庭教育用のカードやビデオ教材がコーナーとして設置されていることなども併せて考えると、乳幼児からの文字や数の指導は、もはやブームというよりも、日本の幼児教育のひとつの類型として、定着しはじめたといっても言い過ぎではないだろう。こうした状況を反映してか、この分野は、いまや産業界にとっての重要

なマーケットの一つとなっており、少子化時代という逆風をものともせず、乳幼児相手の教育産業（以下「早期教育産業」と名付ける）は、着々と業績を伸ばし続けている。

「教育」が産業界の文脈で語られるとき、それは商品＝モノとなる。それは、早期教育産業というシステムにとって、都合のよい需要が意図的・計画的に創出されることを意味する。つまり、早期教育産業は子育ての担い手である親や保育者のニーズにボランタリーに対応しているわけではなく、システムそのものを維持・更新するために必要なニーズを操作することで教育需要を生み出しているわけである。もっとわかりやすく言うと、親は、0歳児のわが子に身近な日用品の名称を覚えさなければならないという必然的な理由があってカードを購入するのではなく、例えば「生活道具カード」³⁾という人気商品が「0歳から文字を覚えさせたい」というニーズや強迫観念を、親という消費者のなかに生み出す。だから、カードを買ってしまうのである。

このとき、「早期教育は是か非か」や「早期教育の弊害」などの教育的な問いかけや議論は、ほとんど無効になる。早期教育推進論者はそのような議論にまじめに付き合ったりはしないし、早期教育産業というシステムは、そのような批判をも巧みに吸収しながら、新しい商品を作り出すことで発展を続けているからである。

ここでの課題は、早期教育の是非をめぐってこれまで行われてきた、教育学者・教育評論家たちと推進者たちとの論争を、早期教育産業の経営戦略という視点から捉え直すことにある。そこで、まず、これまでの早期教育ブームの流れを簡単に整理するために、早期教育産業の担い手である「仕掛け人」たちについて紹介する。つぎに、論争のポイントをいくつかに絞りながら、両者の論理のすれ違いがどのように生起しているのかについてみていく。最後に、早期教育に関連する今後の研究上の課題について考えてみたい。

2. 早期教育産業の担い手たち

井深大のこと

早期教育ブームの火付け役とも言える井深大（ソニーの創業者）が、財団法人「幼児開発協会」を設立したのは、いまから30年ほど前の1969年である（現在は、ソニー教育財団「幼児開発センター」⁴⁾と名称変更）。井深は、協会発足と同時に『幼児開発』という雑誌を創刊し、翌年には「母親研究会」を発足させた。『幼稚園では遅すぎる』(1971)⁵⁾の著書などを通じて、「将来の人材育成のためには幼児の可能性を開発することが急務である」と訴えた。だが、当時の彼の見解は、保育関係者の間で大きな関心をよぶということではなく、かなり周辺的な位置づけをされていたと言えよう。しかしながら、井深は、その後も、『0歳からの母親作戦』(1979)⁶⁾、『0歳—教育の最適時期』(1986)⁷⁾、『井深大の胎児は天才だ』(1992年)⁸⁾と、徐々に対象年齢を下げながら話題性のある議論を展開した。さらに、「お受験ブーム」「早期教育ブーム」を追い風として続々と登場する他の早期教育推進者たちと緊密な連携を図っていくなかで、次第に、早期教育ブームの中心的存在かつシンボリックな存在として注目を浴びるようになった。1997年、逝去。

石井勲のこと

「漢字はひらがなよりやさしい」「漢字教育で集中力や思考力が高まる」として、石井式漢字教育は全国的にも有名。高等学校教諭、中学校教諭等の経験を経て、彼が「幼児期からの漢字教育」の重要性を説きはじめたのは、小学校教諭時代の1962年頃のことである。その後、井深の設立した幼児開発協会のバックアップや自らの継続的な著作活動⁹⁾の成果もあって、幼児のための漢字教育の元祖的存在として、ゆるぎない地位を築いた。現在は、「石井式教育研究会」会長である。

「石井式教育研究会」とは、漢字指導法の研究や指導者の養成を目的とした団体であるが、「日本漢字教育振興会」（漢字教育の普及のために各種イベントを

開催)や、「株式会社登龍館」(教材製作・絵本・教育図書の出版を手がける)を関連団体としてもつ立派なビジネス集団でもある。同研究会の現在の活動は、漢字カードによる国語教育にとどまらず、乳幼児期から小学校中学年までを対象とした知能開発・絵本読み・音楽指導まで幅を広げている。東京・千葉・名古屋・ロスアンゼルスなど7カ所に「能力開発教室」をもち、全国の幼稚園・保育園の課外教室で事業を展開するほか、「母と子の漢字教室」として個別通信指導事業も精力的に行っている。ちなみに、Aコース(0～4歳)の教材費は、21,000円で、6ヶ月(18回)の指導料は36,000円である。あわせて、57,000円也！(平成14年4月現在)¹⁰⁾

七田真のこと

現在、七田チャイルドアカデミー校長、しちだ・教育研究所会長。指導者としての経験は、1958年、島根県江津市に「教育研究所」(という名前の学習塾)を開いたことに始まる。当時は、「小中学生を中心に語学を教えていた」という。やがて、カール・ビッテ著『英才教育の理論と実際』に感銘を受け、3人のわが子への早期教育にのめり込む。この経験をもとに、「0歳教育」についての連載記事を地方新聞に書いたことをきっかけに、早期教育に関する著作・研究活動を精力的に展開するようになった¹¹⁾。

企業家としての経験は、1976年、「もじのカード遊び」という教材を広島のある出版社から出したことが縁で、同出版社内に「七田児童教育研究所」(という名前の事務所)をおいたことにはじまる。以後、広島出版社の倒産をきっかけに、事務所は「0歳教育の仕事を本格的な事業として取り組む」正式の株式会社となった¹²⁾。

1996年、「㈱七田児童教育研究所」は、社名から小学生を連想される「児童」をとって、「㈱しちだ・教育研究所」となる。主な事業は、幼児・児童向けの教材の制作・販売や、幼児教育に関する著作の出版、講習会の実施などである。石井式漢字教育同様、個別通信指導事業も行っている。また、七田チャイルドアカデミー加盟教室(幼児教室)は、現在全国に400を越えるまでに増加してい

る。近年は、胎教のための教材の制作や大人向けの「右脳開発セミナー」にも力を入れている¹³⁾。

公文公のこと

1914年、高知県に生まれた公文は、大阪大学数学科を卒業後、約40年間にわたり数学教育に携わっている¹⁴⁾。「石井」「七田」の名前は知らなくても、「公文」は知ってる、というぐらい知名度は高い。というのも、公文式教室のフランチャイズ展開で、全国津々浦々に18,400もの教室があり、ちょっと近所を歩けばすぐに「公文式」を見つけることができるからである。公文教室の前身は、1956年に、大阪市に開いた算数・数学教室である。1958年に、「公文数学研究会」事務所を開設。以後、急速に事業を発展させ、1983年には、「(株)公文教育研究会」を誕生させた。現在は、国内で8社（くもん人材開発センター、くもん出版、くもんサービスなど）、海外で20社の関連会社をもつ企業へと成長しており、従業員は公文グループ全体で3,100人、経常利益は57億9,500万円（2001年3月）をあげている。また、公文式教室の指導者数は全国で15,700人、生徒数は1,494,400人おり、世界42の国と地域にも、公文式教室が「輸出」されており、その生徒数は1,368,000人（2001年3月）¹⁵⁾というから驚きである。

事業展開をみていて興味深いのは、英語教室（1980）、国語教室（1981）、日本語教室（1984）、フランス語・ドイツ語教室（1986）など、どんどん指導教科の枠を広げながら、方法は算数・数学教室で開発された難易度の低いところからステップ・アップしていくプリント中心の方式で一貫している点である。単純でわかりやすいからこそ、マニュアル化が可能であり、マニュアル化が可能であるからこそ、広範なフランチャイズ展開が可能ということか。

3. 早期教育論争を捉え直す

一枚岩の教育観

教育観は人によって千差万別である。個人の性格、育ってきた環境、その人

自身の経験等、教育観の規定要因も実に様々であろうから当然のことかもしれない。ところが、早期教育論争をレビューしてみると、不思議なことに、批判者の側には、そのような多元的な教育観が見え隠れするのに、推進論者には、まるで一枚岩のように類型化された教育観を感じてしまうのは気のせいだろうか。

教育学者や教育評論家からの、ある意味、まっとうな問いかけや疑問に対し、推進論者たちは、まるで一致団結して、自分たちの主張に合致する少数の事例を強調したり、論点をわざとずらしたり、あるいは先取りしたりして、議論にまともに向き合おうとはしていない。気楽にみていると、まるで人生の経験を積んだおじいさんたちが、これまでの「実績」や「成功体験」に固執して他人の意見に耳をかそうとしていないだけのようにも思える。でも、そう単純な話ではない。

これまでみてきたように彼らは教育者というより企業家である。彼らにとっての共通の優先課題は、早期教育産業というシステムを維持・発展させることである。教育論は、顧客をそのシステムに効果的に誘導するための重要な広報活動なのだ。そのような視点で、早期教育論争をみていくと、「教育」の裏に隠された「ビジネス」の姿がより明らかになってくると思う。

ここでは議論を整理するために、次の3つの論点、すなわち①知の定着度、②知のバランス、③教育観に絞って話を進めていこう。

論点1：知の定着度をめぐって

内発的動機づけや体験を伴わない知識

第一の論点は、二歳児や三歳児が方程式を解いたり、難しい漢字を覚えることが仮にできたとしても、それが内発的な動機づけを伴っておらず、また、体験に基づいて得た知識でもないの、いずれは忘れ去られてしまうのではないかというものである。これは、早期教育の功罪云々の議論というより、早期教育の効果そのものに対して向けられている問いである。

たとえば、加藤繁美は『早期教育が育てる力、奪うもの』のなかで、「二歳や

三歳で、意味も理解していないむずかしい漢字を覚え、方程式や微積分を解いていたことが、はたして大人になるまで、いや少なくとも大学受験までもつか¹⁶⁾と、率直な疑問を述べている。加藤によれば、早期教育で得られる知識は「記号的知識」に過ぎず、「身体記憶」や「納得知」に至るような、体験や理解に基づいた反復練習を行わない限り定着しないのではないかと¹⁷⁾というのである。

加藤だけではない。汐見稔幸も『警告！早期教育が危ない』のなかで、「本を早くから読めるようになったからといって、幼い子どもが恋愛の意味や人間の自由の本質などについて理解できるはずがない。計算が早くからできるようになったからといって、三角関数が必要になる世界や微分積分が切り拓く世界について幼児にイメージがもてるわけではない。要するに意味理解—それは主に前頭葉がつかさどる—は生活経験のレベルに応じてしかできないわけで、人間の能力の最も重要な部分を早期に、人より早いペースで教育することは、やはり無理だと考えておくのが無難なのである」¹⁸⁾と言っている。

結論として、加藤は「わかる」と「できる」こと統一するためには、「早期教育ではなくて、年齢と発達段階に相応しい学習をすべきだ」¹⁹⁾とし、また、汐見も「そんなに早くから勉強を開始しなくとも、内発的な動機が育ってきてから始めても充分ということにならないだろうか。内発的な動機づけがある程度できるようにならない限り、知識を覚えても十分に定着しないのではないかと」²⁰⁾と述べている。

「楽しい」なら何でもいいのか

それでは、早期教育推進論者たちは、これらの疑問についてどのような見解をもっているのだろうか。まず、公文は『二歳で本が読める』のなかで、公文式教室で学んだ幼児たちが有名国立大学に入学したり、数学オリンピックの日本代表に選ばれるなどしたという、いくつかの成功例を紹介しながら、「早い時期に教育を受ければ受けるほど、高い知能を身につけ、その知能をもとに充実した人生を送っている」²¹⁾と述べている。さらに、彼は「公文式学習は、一人一人の能力に合わせて、理解できるやさしいところからはじめる」²²⁾というこ

と、「わかるところからスタートし、そのことを手がかりとして、次の段階へと確実に進めるので、学習することが楽しいし、らくに学力が身についていく」²³⁾と主張している。

同様に、石井も、幼児の「能力」に見合った「楽しい」ものであることを強調し、『幼児はみんな天才—石井式漢字早教育のすすめ—』のなかで、こう述べる。

目で見、手で触れることのできない単なる音声を表すカナは、幼児にとって誠に理解しにくいものでありますが、具体的内容を持ち、目で見、手で触れることの出来る実在を表した漢字は、理解が容易で、幼児は喜んでかたっぱしから覚えてしまいます。その覚え方は、実に天衣無縫で、目に触れる漢字は何の苦もなしに、即座にとらえて頭に入れてしまいます。覚えようなどという気持ちはつゆほどもありません²⁴⁾。

両者ともに、学習の「楽しさ」をベースにした幼児期からの早期教育こそ、年齢と発達段階にふさわしい教育なのだという考え方である。ここで気になるのは、「楽しさ」という言葉が、「楽しいんだから、いいではないか」という意味で用いられていることである。また、彼らの著書を注意して読む限り、乳幼児が感じているとされる「楽しさ」の意味について、深い次元で掘り下げて考察しようとする姿勢はみられない。幼児期からのおけいこ事として、ピアノやバレエなどがあるが、それらの指導者たちは、「楽しさ」ばかりを強調したりするだろうか。技能の習得には、楽しさだけでは成り立たない厳しさも伴うことを指導者自身が知っているからである。公文は4歳で方程式を解いたのか、石井は3歳で漢字が読めたのか。いまの社会において、幼児期に方程式を解くこと、漢字を習得することの必然的な意味・理由など存在しない。(もしもあるとしたら、後でふれるように、「小学校に入ってから困らないでしょう」というような陳腐な理由しか残らない。)

繰り返すようだが、早期教育産業システムが起動するのは、乳幼児期からどうしても必要なもの、というような前もって想定される理由(価値や規範の秩序)が存在するからではない。いったん形成され、機能しはじめたそのシステ

ムを維持するために、必要な理由（教育論）が後から生み出されるのである。

論点をはぐらかす

七田は『七田式右脳全開教育』のなかで、批判論者が体験知の重要性を説くことに対して、次のように反論している。

このようなことをいう人は、直感の働かない左脳人間であることがわかります。このタイプの人には、ギターを教えるのに、実物のギターがどのようなものであるかに触れさせ、音も聞かせて教えなければ、身についた教育にならないとよくいいます。それでは楽器を教えるのに、今日はピアノ、明日はマンドリン、次の日はチェロと、毎日実物を教室に持ってきて、音を聞かせ、実物にふれさせて学ばせなくてはなりません。動物について教えるには、象、キリン、ワニを教室に運んでこなければなりません。直感的にその不合理性がわからずにそのようなことをいうのは、右脳の直感がすぐれておらず、すべて左脳的に考えているしるしです。絵カードや絵本で、前もってすべての動物を知っているのだから、あるいは多くの名画を見知っているのだから、動物園にいったとき、美術館に行ったとき、実物に触れて大きな感動を得ることが可能なのです²⁵⁾。

この詭弁的な発言が、意図的なものなのか、そうでないものなのかはわからない。批判論者たちは、知識習得というものは、子どもたちの生活の実際と密接に結びついたものである必要があると指摘しているだけである。つまり、生活の様々な機会に際して、日常の事物や動植物等について、観察したり触れたりするなかで、ごく自然に学んでいけばよいということである。それに対し、七田は、フラッシュカード方式による学習を価値前提におきながら、「体験知」をめぐる議論に参加することで、論点そのものをずらそうとしている。

論点2：知のバランスをめぐる

自分で考える力や社会性を育てることへの疑問

第二の論点は、「知のバランス」に関わる問題であり、早期教育の功罪にさら

に踏み込む内容のものとなっており、議論の最も重要な争点ともなっている。たしかに、早期教育推進論者たちは、乳幼児期は「自分で考える力」を育てるよりも、「丸暗記の時期」と捉えている。それは、井深が『0歳からの母親作戦』のなかで、「この時期の幼児の頭脳は大人の頭のような批判的、分析的な見方がない白紙状態であるだけに、理解とか納得とかを要しない吸収力を持っていると言ってよいでしょう」²⁶⁾と述べていることからわかる。

これに対して、加藤はこの時期の子どもを受動的な存在としてのみ捉えようとする早期教育論者の「能力観」および「人間観」を問題視し²⁷⁾、「生活体験と切り離された知識を受動的に学ばされていくことが、その後、その子のなかに形成される『知の構造』にアンバランスな状態をもたらすのではないか」²⁸⁾、さらに「与えられた情報に対する『過剰適応』とでもいうべき状態で幼児期をすごすことが、子どもの『自分づくり』とコミュニケーション能力の発達に、何らかの障害をもたらすのではないか」²⁹⁾と問いかけている。

また、小宮山も、『早期教育をまじめに考える本』のなかで、自分で考える力について、「自分から何らかの知識を得たいという能動的な気持ちが無くなってしまい、ただ大人に言われていることを受け入れていけばよいのだという人間を、幼児のうちから作り出してしまう危険」³⁰⁾についてふれ、社会性に関して、「もし、早期教育のために幼児同士の触れ合いが少なくなったとしたら、そのような教育を受けた幼児は、知能は高くなったとしても、他人の気持ちを理解できない人間になってしまう危険性があることを、もっと多くの大人は気がつくべきではないでしょうか」³¹⁾と述べている。

推進論者たちの反論

このような指摘に対して、公文は「文字は機械的な暗記からはじまります。最初から意味や書き方を教えないことが大切です。『考えることが大切だ』などと思っ

てはいけません。機械的な暗記がある程度多くなることによってこそ、考えられる条件がととのってきます」³²⁾と答えている。さらに、社会性についても、「『成績が優秀な子どもは、思いやりがない』、『自分が頭が良いと思う子ど

もはうぬぼれてしまって、他人のことを思いやるゆとりが育たない』などと言う人がいますが、幼児のときから考える力を育ててきた場合は、そういう心配はまったくなく、と自信をもって言うことができます」³³⁾と述べている。

汐見は『幼児教育産業と子育て』のなかで、家庭教育研究所の研究者による調査³⁴⁾(早期教育を受けている3歳児と受けていない3歳児について、「社会性」「言語性」「情緒性」などの6項目から発達状況をみる調査で、すべての項目で早期教育を受けている子どもに発達の遅れが見られるという内容)にふれ、「子どもたちに幼い頃から意識的に教えようとしすぎることの危険性」³⁵⁾を指摘している。

しかし、七田は、この種の調査にふれながらも、「それだけで早期教育は悪いという結論が引き出されるでしょうか」³⁶⁾とし、こう続ける。

私の行っている七田教育は、体験型とかパターン型とか、どちらかに区別されるものではなく、バランス教育なのです。決して一つに偏った教育ではなく、情緒性、自発性、運動性、認知性、社会性のすべてを考えた子育てを行います。全人格的な教育。それが七田教育の特徴です³⁷⁾。

このような論点の先取りともとれるような発言は、公文も行っている。彼はこう述べて、批判をかわそうとする。

数学や国語や英語の学力をつけて成績を上げることはもちろん大切なことですが、公文式が目標とするところは、考える力を養い、自学自習の態度と習慣を身につけた人間を育てる³⁸⁾ことです。

推進論者たちの責任

批判論者たちが危惧しているのは、親と子が早期教育産業システムのなかに過剰適応という形で包摂されてしまうことで、親も子も、「自分で考える力」が奪われてしまうことである。大切なのは、子どもの育つ環境を創る主体があくまでも親であり、その親が、早期教育産業の提示するメニューを必要に応じて取捨選択できる力を保持しているかどうかである。ところが、システムというのは、いったん起動すると自己組織的に秩序が形成されて、意図せざる結果と

して、構成員の行動を逆にコントロールしようとする側面が生まれる。だから、「はまり込めばはまり込む」ほど、自分が何のためにそういうことをしているのかの判断力がなくなってくるのである。公文は、「考える力を養い、自学自習の態度を身につけた人間を育てること」が目標だと言い、七田は、「すべてを考えた子育て。全人格的な教育」を行うことが特徴だと言う。組織が「目標」としているものは、たしかに、そうなのかもしれない。だが、彼らが企業家であると同時に、教育者でもあることを誇りとするのであれば、自らが掲げる目標とは逆機能的に作用する側面が現実にあるということに対しても、もっと誠実に向き合う責任があるのではないだろうか。

論点 3：教育観をめぐって

機械的教育概念 VS 有機的教育概念

早期教育推進論者の教育観の根底にあるのは、機械的教育概念である。それは教育を白紙に文字を書き込むような行為と考えるものであり、指導者が自分に任された子どもを、達成されるべき目標へ向けて、一定の方法で形成するという考え方である。だが、教育観には、もうひとつの側面、つまり、子どもは指導者によって任意に加工される材料ではなく、固有の自立的な法則にしたがって扱われなくてはならない存在であるという教育観がある。有機的教育概念と呼ばれるものであるが、以下の、梶村蹊子の言葉にそれが表れている。長くなるが、わかりやすくポイントをついていと思うので、引用しておこう。

子どもは、「自分で育つ力、内的な力」を持っているということです。親はともすると子どもを真っ白い紙にたとえて、その上にどんな絵を描こうか（どんなことをやらせようか）と考えてしまいがちです。でも、それはまちがいです。子どもはひとりひとりが個性を持って生まれてくるもの。親は「どんな個性を育てるか」と考えるのではなく、「どんな個性の花が咲くのか」をじっくりと見守る気持ちを持っていてください。……（中略）……幼児期に外界から教え導く必要はありませんし、そうすることは逆にせっかく子どもが持っている内的な生命力を弱めてしまうおそれがあるの

では、と懸念しています。知的な早期教育を受けている子どもは概して不安感が大きく、子どもらしい遊びに没頭できない傾向があります。……親がすべき大切なことは、子どもの内的な成長を助けるために、静かで落ち着いた「生活」をつくってあげることだと思います。……（中略）……「何もしない」ように見えるぼーとした時間こそ、子どもの内面で何かが育っている大切な時間であることをどうか忘れないでください³⁹⁾。

小学校入学前の幼児にさせることの根拠

発達課題という概念がある。それぞれの発達段階にある個人がそれを達成しなければつぎの段階に行くことが困難となるような発達基準のことである。幼児期は、そのなかでもとりわけ重要な意味をもつことは言うまでもない。ルソー、ペスタロッチに始まる近代教育学の歴史は、まさに、この時期がいったいいかなる意味をもつのかを探究する歴史でもあった。幼児期の、この時期にしかできない「あそび」の重要性もその探究の過程のなかで導き出されてきたと言えよう。

早期教育推進論者たちも、この幼児期が児童期・思春期へとつながる成長発達過程のなかで大切な時期であるという認識は共通して持っている。しかしながら、その拠って立つ能力観や人生観には、合理主義あるいは功利主義的なものが色濃く反映されている。彼らは脳生理学などの「科学的認識」を重視し、目的＝手段関係を理路整然と説明し、計画的、能率的な指導計画のもとで、社会において「有能な」人間となるための教育を施そうとしている。「楽しんで学ぶ」子どもたちとの「合意」に基づいて。

公文は、こう述べる。

私はかねてから「最小の努力で最大の効果を上げることが、もっとも賢いことだ」と考えてきました。中学生や高校生になり、クラブ活動やスポーツに楽しい時間を使いたいときに、なにもかも犠牲にして受験勉強に励むのは、賢いやり方とは言えません。幼児のときに学習習慣、学ぶ力をつけておけば、ふつうの人の半分以下の努力でらくらく目標を達成できるので

す⁴⁰⁾。

また、七田は保坂展人との対論のなかで、保坂の「学校入学時まで気ままに遊んでいて、字が読めないと必ず悲惨なことになる」と親たちを焦らせないでほしい。幼児期を楽しく遊び、自分の名前が読み書きできる程度で、元気いっぱい過ごしている小学生がこの日本にもたくさんいる⁴¹⁾という問いかけに対する答えとして、「小学校入学時に字が読めなかったり遊ぶにまかせて育った子どもが、学校で落ちこぼれている事実をご存じないのですか⁴²⁾」と述べ、さらに、「学校の勉強が楽になる、のに勝る利点はありません⁴³⁾」と言いきっている。まさに、彼らは、「学校文化に適應すること」に重きをおきながら、幼児期をその後の学校段階にスムーズに移行するための準備期間として位置づけているのである。

このことは、幼児期固有の旺盛な記憶力に着目する石井も同様である。

幼児期にこれを与えるならば、これを容易に身につけて、小学校に入学した時には、楽しんで文字の学習よりも文章の内容を追求する、そういう学習に進められるだろう⁴⁴⁾。

幼児の「あそび」の世界

これに対して、加藤は、幼児の世界は、意味や価値の世界と無関係なところで展開される「あそび」の世界であり、自分の感情や要求に従いながら、子ども自身が「内的ルール」を作り上げることで成立する世界であると捉えている⁴⁵⁾。また、対比的に、早期教育は「価値や意味の世界を体系化・記号化して子どもの中に入れていくことで成立する」世界である⁴⁶⁾とする。つまり、早期教育は、幼児が「あそび」によって得られるはずのものを失わせる危険性がある⁴⁷⁾というのである。

たしかに、早期教育推進論者の著書のなかで出てくる「遊び」の概念は、勉強＝ストレッサーとの対概念として用いられている。大人の世界でよく言われる「もう、やっとなれん。ばあっーと遊びに行こうか!」の「遊び」と同じ意味である。幼児期本来の意味の「あそび」が出てこないのはなぜだろうか。そ

これは、「あそび」という「意味や価値と無関係なところで成立する（加藤）」世界が、早期教育産業システムが必然的に要請する機能的合理性となじまないからである。ここでいう機能的合理性とは、乳幼児の「知能を向上させる」という組織目標のもとに、フランチャイズ教室など所属する指導員と、「自発的に合意した」子どもとの間に生まれる効率性を重視した範型（パラダイム）である。そのなかでは、組織目標の達成に貢献できるような客観的で実践的な解（指導方法・指導成果）が常に求められている。その手段—目的図式という機能的連関のなかでは、加藤が言うような幼児期本来の意味の「あそび」は見事にこぼれおちてしまうノイズでしかないのである。だから、彼らは「あそび」について語らないし、語ろうとしないのである。

いや、もしかしたら、七田なら言うかもしれない。「七田式は、全人格的な教育をしているので、当然、あそびの重要性も理解しているし、指導プログラムに、あそびの要素も充分取り入れてます」と。もしもそうなら、それこそ、彼が「あそび」を真に理解しようとしていないことの証明となろう。幼児期の「あそび」は、そういう一つの事業体がコントロールできることから、遠く離れたところに存在するのだから。

4. 結びに代えて

組織を発展させるために、最も大きな影響力をもつのは、言うまでもなく、リーダーシップである。これまで、取り上げた早期教育関連団体が、この30年の間に、急成長を成し遂げたのは、ひとえに、創業者の個人的な思考様式や行動力によるものにほかならない。カリスマ的とも言うべき彼らの言動を通じて植え付けられた組織の文化は、それに従事する人々のアイデンティティの基礎となり、組織を結束して成長させる推進力となっている。その文化のなかでは、早期教育をめぐるまっとうな疑問・批判も無化されてしまい、知らない間に、家庭、保育園・幼稚園のあちらこちらで、早期教育そのものが既成事実化してしまうような現実が進行しつつある。

もちろん、このような状況を生み出した背景を、早期教育産業の側だけに求めることはできない。ここで、早期教育産業の成長を支えてきたもうひとつの要因・背景についてふれておく必要がある。汐見は、『幼児教育産業と子育て』のなかで、親の側の育児疲労や忌避感が、育児産業を求めることにつながっているとし、その日本的な構造・要因に関連して次の4点に整理して述べている⁴⁸⁾。

第一に、現代の親の大部分は、家庭や学校で「親」になるように教育を受け社会化された経験を持っていない。子どもの数の減少や高学歴化によって、子どものころに子守りを経験することも少なくなっている。そのため、育児についての実際的な知識や体験、心づもりなどを十分に持たないまま親になる。

第二に、現代の若い母親は、生産主義ではなく消費主義（生活の中心が生産よりも消費行為にあるとする考え方）の時代に生まれ育ってきている。そのため、何かを自分で手をかけてつくるというよりは、適当な金額であれば買って間に合わせる方がより合理的と考える傾向の強い人たちが一般的である。

第三に、産業社会のあり方は大きく変化しつつある。こうした時代には、子どもの成長する先の時代のイメージをはっきりと描くことがむずかしく、子どもにどのような能力を育てるかという子ども像・人間像も描きにくい。だが、どの時代にも通用するという意味で「頭の良さ」を子どもに求めがちになる。

第四に、今日の育児環境は親に対する負担を強めていて、親だけでは担いきれなくなっている。そこで、どうしても育児負担や忌避感が強くなってしまうのだが、一方で、母性強迫のため「よい母親」にならねばという考えが強く、その「よい母親」を続けるために、育児産業が提供する良質のサービスを購入しようとするようになってくる。

先にも述べたことだが、変動する社会状況のなかにおいて、育児をとりまく環境がどのように変化しようとも、わが子の育つ環境を支え創り出していく主体が、親であることに変わりはない。それは、今後いかに子育てに関して良質な商業的支援がなされたとしても、変わることはない現実である。システムを利用することはあっても、システムに利用されていることに無自覚であっては

ならない。それは、人間が受動的な存在でなく、価値や意味を創造する存在だからである。そのような存在として、子どもの前で、親自らが体現しうるかが、子育て環境の主体となり得るかの証明となる。

もちろん、親だけの問題ではない。ここでの研究者の仕事は、親が本当に子育て環境を創る主体となり得るような条件づくりにいかに貢献できるかにある。その条件のなかには、国や自治体はその責任において行うべき行政的支援の問題も当然含まれる。単に理想を語るだけのものでなく、その学問的意味が、つねに現実に進行している「現代の子育て」との関係において問われるものでなければならない。そのなかで、何をなすべきか、何ができるかを問い続ける必要がある。

注および参考文献

- 1) 文部省『幼稚園教育要領』1998年12月。
- 2) 同上書。
- 3) くもん出版が出している「くもん生活図鑑カード」のひとつで1998年に発売された文字カード。身近な生活道具31点について、表に絵、裏にひらがなでその名称が書いてある。
- 4) <http://www.sony-ef.or.jp/eda/>は、(財)ソニー教育財団 幼児開発センター(EDA)の公式ホームページで、活動の歴史やねらいについて述べられている。
- 5) 井深大『幼稚園では遅すぎる』ごま書房、1971年。
- 6) 井深大『0歳からの母親作戦』ごま書房、1979年。
- 7) 井深大『0歳は教育の最適年齢』ごま書房、1991年。
- 8) 井深大『井深大の胎児は天才だ』チクマ秀版社、1992年。
- 9) 石井勲の主な著作として次のようなものがある。
『幼児はみんな天才—石井式漢字教育のすすめ—』(日本教文社、1987年)、『漢字興国論—IQを高める漢字教育—』(日本教文社、1992年)、『石井式漢字教育革命—幼児でも自然に身につくラクラク学習法—』(グリーンアロー出版社、1995年)、『0歳から始める脳内開発』(蔵書房、1997年)、『幼児は「漢字」で天才になる—漢字はひらがなより覚えやすい「石井式漢字教育」現場からのレポート—』(コスモトゥーワン、2000年)
- 10) 石井式教育研究会の公式ホームページ (<http://www.isiisiki.co.jp/>) より。
- 11) 七田真の主な著作としては、以下のようなものがあり、現在までに100冊を越え

ている。

『0歳教育のすすめ』(日本教文社, 1980年), 『赤ちゃんを賢く育てる秘訣』(日本経済通信社, 1985年), 『赤ちゃんは天才!』(ベストセラーズ, 1997年), 『驚異の七田式右脳学習法』(PHP 研究所, 2000年), 『胎児からの子育て』(ウィズダムブック社, 2001年)

- 12) 七田真の経歴に関する記述は, 彼の著書である『七田式右脳全開教育』(文芸社の「第4章 七田式教育はこうして生まれた」(147~175頁)を参照している。
- 13) この記述は, 七田チャイルドアカデミー (<http://www.shichida.ne.jp/>), しちだ教育研究所 (<http://www.shichida.co.jp/>) を参照。
- 14) 公文公の自伝『やってみよう』(くもん出版, 1991年)には, 少年期からの数学に対する関心や算数・数学教育に携わった経緯についてくわしくふれられている。
- 15) 数字は, (株)公文教育研究会の公式ホームページを参照した。(<http://www.kumon.co.jp/index.html>)
- 16) 加藤繁美『早期教育が育てる力, 奪うもの』ひとなる書房, 1995年, 90頁。
- 17) 同上書, 91~92頁。
- 18) 汐見稔幸「現代早期教育事情」, 高良聖編『警告! 早期教育が危ない』日本評論社, 1996年, 41頁。
- 19) 加藤繁美, 前掲書, 92頁。
- 20) 汐見稔幸, 前掲書, 35頁。
- 21) 公文公『二歳で本が読める』講談社文庫, 1992年, 183頁。
- 22) 同上書, 194頁。
- 23) 同上書, 194頁。
- 24) 石井勲『幼児はみんな天才—石井式漢字教育のすすめ—』日本教文社, 1987年, 119~120頁。
- 25) 七田真『七田式右脳全開教育—子どもの才能を余すことなく引き出すシステムとトレーニング』文芸社, 2002年, 97頁。
- 26) 井深大『0歳からの母親作戦』ごま書房, 1979年。
- 27) 加藤繁美, 前掲書, 72頁。
- 28) 同上書, 81頁。
- 29) 同上書, 82頁。
- 30) 小宮山博仁『早期教育をまじめに考える本』新評論, 1999年, 95頁。
- 31) 同上書, 93頁。
- 32) 公文公, 前掲書21), 226頁。
- 33) 同上書, 162頁。
- 34) 家庭教育研究所『紀要』15号, 1993年。
- 35) 汐見稔幸『幼児教育産業と子育て』岩波書店, 1996年, 153頁。
- 36) 七田真, 前掲書25), 24頁。

- 37) 同上書，25頁。
- 38) 公文公，前掲書，188頁。
- 39) NHK すくすくネットワーク，2001年9月号，日本放送協会，29頁。
- 40) 公文公，前掲書，160頁。
- 41) 保坂展人『ちょっと待って！早期教育』学陽書房，1996年，103頁。
- 42) 同上書，103頁。
- 43) 同上書，105頁。
- 44) 石井勲，前掲書24)，124頁。
- 45) 加藤繁美，前掲書，82頁。
- 46) 同上書，82頁。
- 47) 同上書，90頁。
- 48) 汐見稔幸，前掲書35)，104～109頁。